

厳しい顔つきをした父に連れられた男の子は、自分がここに居るのは間違いだともいわんばかりに申し訳なさそうにうつむいていた。母がその男の子と父の顔を交互に見て問いかければ、父の姉の子ども、つまりわたしの従弟だという。

大雨の日に馬車で出かけた夫妻は、幼い子どもを残して帰らぬ人となったらしい。成人するまで後見人として男の子の面倒を見るために屋敷に連れ帰ったのだという。

「どうして事前の相談もなく勝手に決めてらっしゃるんですか！」

父に食って掛かる母に、今回も長くなりそうだと察したわたしは、母の声にカタカタと小さな身体を震わせている少年の手を取った。

「これから大人たちでお話しするみたいだから、わたしたちはあっちで遊んでましよう」

「え、で、でも」

わたしは少年の手を握った。頼りなく視線をさまよわせる少年に、わたしはなるべくやさしく笑いかける。

「わたし、弟がほしかったの。あなたがよければ、お姉さまになりたいな」

その言葉によりやく安心したのか、少年は弱弱しい手でわたしの手を握り返した。

「エリゼ、あなたについて縁談がきましたよ」

長年の苦勞のせいか最近目尻の皺が目立つようになった母が、珍しく機嫌がよさそうにほほ笑んでいる。機嫌を損ねないように細心の注意を払いながら手紙を受け取れば、品のよいきつちりと大きさがそろった文字が連なっている便箋が目に入る。紳士的な文面も好印象で、ただ少しだけ古めかしい言葉づかいなのが気になった。

「優しそうな方ですね」

「ええ、とっても素敵な方よ。それにあなたも何度か舞踏会でお話したことがあるでしょう？ フィンツイ公よ」

「フィ、フィンツイ公ですか……?! 少し年齢が離れすぎでは……」

最近ようやく成人したばかりのわたしと、もう少しで五十に年齢が届くフィンツイ公では親子ほど年が離れている。わたしがさすがに難色を示せば、母が

眉を顰めてまとう空気がかわった。

——あ、まずい。

長年の勘で、一瞬で彼女が機嫌を損ねたのがわかる。さきほどまでの奇妙なまで高かった声が一気に低くなった。

「あなた、お相手を選べるとでも思っているの？ 本来ならこの家を継ぐのはあなたか、あなたの婿のはずだったのよ。それが、あなたが不出来なせいで、外からきた人間に家を奪われようとしているのに……！」

母の言葉に、わたしは視線を泳がせるしかない。家を奪われる、と母が憤っているのは義弟のことだ。叔母の子である義弟は、最初こそ不慣れな家で肩身が狭そうにしていたものの、持ち前の優秀さで父の仕事を手伝うようになった。父はその過程で、義弟に才能があることに気がついたらしい。正式な妻である母が産んだ娘であるわたしよりも、自分の姉の忘れ形見である義弟の方を跡継

ぎとして指名してしまった。

義弟自身は頭がいいのに鼻にかけたところもない好青年だが、母からしたら存在自体が面白くない。おまけに娘のわたしが一緒になって彼を毛嫌いしないのも、母の苛立ちに拍車をかけるようだった。

「とにかく、あなたでもお母さまの役に立てる日が来たの。どうするのが一番いいか、ちゃんと考えなさい」

反論は許さないというように冷たく言い放った母は、それだけ言い残して部屋を出ていく。わたしは机に残された手紙を見つめながら深い溜息をついた。

夕食を終えてからぼんやりと外を眺める。何度も手紙を眺めても、わたしの運命が変わるわけじゃない。

「……一度くらい物語みたいな恋愛とかしてみたかったな」

メイドにこっそり買ってきてもらった、母が見たら卒倒しそうな小説のページをめくる。

主従関係の道ならぬ恋に燃える男女が、すべてのしがらみを捨てて家を飛び出すところで物語は終わっている。繰り返し呼んだそれはすっかり表紙がすり切れていた。

「道ならぬ恋ねえ」

ぽつりと呟けば義弟の、アルフレッドの顔が浮かぶ。本来自分が継ぐはずでない家に乗っ取った弟と、自分の役目を奪われた不遇の姉。傍から見れば関係が良好なはずはないが、わたしたち姉弟はいがみ合っているのではない。両親はわたしたちの仲がよいのを苦々しく思っているだろう。

けれどもアルフレッドがこの屋敷に馴染むためにした血の滲むような努力を知って、嫌えるはずもなかった。でもそれ以上に、立派な青年に成長した彼に、

家族愛では説明のつかない感情をいだいていた。

「……どうかしてゐるわ、ほんとうに」

机のままに置いたままの便せんを綺麗に畳む。どうせ避けられない結婚ならば、早く結婚してしまおう。この想いを誰かに悟られないためにも、家を出るのは早いほうがいい。

大丈夫。貴族の子女であれば望む相手と婚姻できる方が稀なのだから。

大きく息を吸ってから母の部屋を訪れようとドアノブを回せば、顔が硬いものにぶつかった。

「いたた、アルフレッド？」

「姉さま、ちゃんと前を見て歩いてください」

形のよい眉を歪めながらアルフレッドが軽く苦言を呈する。悩みの種である本人にふいに会ってしまつて、わたしはたじろいだ。

頭のとっぺんからつま先までまじまじと見れば、幼い頃の柔らかさはそのままに、洗練された紳士に成長していると実感する。最初はわたしの背中に隠れながら、人の顔色を窺っていた。でも今の彼は父の名代として仕事を取り仕切り、難しい相手でも臆することなく交渉できるのだ。

「いやあ、アルは立派になったねえ……」

思わず口にすれば、微笑みながら肩をすくめる。

「どうしたの、藪から棒に」

「アルフレッドが立派になってくれて、姉さま嬉しいわ。安心してこの家をまかせられる」

「……姉さま、まさかこの家を出るの？」

仕事で人の表情を読み慣れているからか、ズバリと言い当てられて目を丸くする。自分の口から結婚するなんていいたくないが、世間の姉たちはなんの感

情もない弟に嫁ぐことを言い淀んだりはしないだろう。

「ええ、結婚するの。フィンツイ公からお手紙をいただいたの。ずいぶん年上の方だけれど、手紙から感じるお人柄はお優しそうな印象をうけたわ」

まるで軽い世間話でもするような調子で笑う。アルフレッドが片方だけ眉をつり上げながら口を挟んだ。

「……夫婦というよりは親子じゃないか。よくない噂もあるし」

「よくない噂？」

舞踏会には人並みに顔を出している。あまりにひどい悪癖があれば、いくら高位の貴族であってもあつという間に人々の噂話にのぼるはずだ。知らないはずがないと首を傾げたけれど、弟はすでに家業を取り仕切りつつあるから別のルートからよくない話を聞いたのかもしれない。

「ああ、大変な女好きでね。寝るときは若いメイドを枕代わりにするといつて、

添い寝させているとか」

「そ、そうなの？」

さすがに母がそんな相手にわたしを嫁がせようとするはずはないと信じたいが、家格の高い相手と繋がりたいばかりに大きな欠点に目をつぶっている可能性も大いにある。

「まだ正式にお返事はしていないなら間に合うよ。姉様、お断りするべきだ。ボクからも父上に進言してみよう」

想像して顔を青くするわたしの背中を、アルフレッドがそっと撫でる。まるで恋人を安心させるようにやさしく微笑む彼に、とくと胸の鼓動が跳ねた。この話を断れば母は激怒するだろう。父も娘のわたしには無関心だから、この話が破談になっても、次にいい縁談を持ってくるとは限らない。いずれにせよ、しばらくはこの家に身を置くことになるだろう。

その間に弟を恋い慕っているのがなにかの弾みでバレてしまったら？

アルフレッドはわたしのことを軽蔑するに違いない。

「……アル、ありがとう。でもわたし、このお話うけようと思うの」

「エリゼ姉様？」

「家同士の話だし、フィンツイ公は立派な方だわ。至少くらい女好きであつてもそのくらい目をつぶればいいのよ」

自分でも白々しいと思える台詞を吐きながら、アルフレッドに背を向ける。

正直、評判のよろしくない相手と結婚するなんていやだ。けれども、この家に留まり続けてアルフレッドに気持ちが悪れることの方がおそろしい。それにアルフレッドもいつか彼に釣り合う女性と結ばれるだろう。このままどこにも嫁

がずにいれば、すぐ側でそれを見つめることになる。そうなればきつと耐えられない。

「……そうか、エリゼ姉さまの気持ちはもう決まっているんだね」

アルフレッドの声が少し震えた気がした。同情して憤ってくれているのだろうか。本当に優しい子だ。

「姉さま、返事をするのは明日でもよろしいでしょう。本格的に結婚するとなれば姉弟水入らずでお話する時間もなくなる。今日は子どもどものときのように姉さまとたわいもないお話をしたいな」

アルフレッドがおもむろにわたしの手を取る。やわらかかった少年のころの手は違う、ゴツゴツした男の人の手だ。それなのに、小首をかしげる姿はあの頃のままで、父の右腕として海千山千の貴族たちと対等に渡り合っているとは到底思えない。

それだけ心を許してくれているんだと舞い上がりそうになる。

「わかったわ、じゃあ姉さまとお話しましょうか」

ふたりでベッドに腰かければ、アルフレッドが懷からキラキラと輝く首飾りを取り出す。

「まあ、どうしたのそれ？」

「とある貴族の方から譲り受けたものなんだ。なんでも美しいけれど持ち主を破滅させるいわくつきの宝石なのだから」

「いわくつきの宝石……？　大丈夫なの？」

「ふふ、どうでしょう。試してみますか？」

アルフレッドがいたずらっぽく笑いながら首飾りをわたしの眼前に掲げる、しやらん、鎖の金属が鳴る音が静かな部屋に響いた。

もし本当に危ないものであれば、軽率に試してみようなどというはずがない。

きつと、のろいというのは眉唾なのだろう。

「ほら、姉さま。この台座にはめ込んだ深い赤色の宝石を見てください」

わたしは素直に弟の言葉に従って、首飾りをのぞき込む。そうすると台座の中心に真つ赤なルビーを埋め込んだそれがあやしく光った気がした。それに続いてどくん、と身体中の血管が広がるような感覚がする。

一瞬驚いたが、別に具合が悪くなるわけではない。少し驚いて脈が速くなっただけで、あとはなにも変わらない。

「……なんともないみたいだね」

茶目つ氣たつぷりの笑顔を浮かべながら肩をすくめる弟に、わたしは笑った。

「アルったら、わたしを怖がらせてどうするつもりなの？」

「ごめんね、姉さまが悩んでいたから」

「もう！」

二人で見つめ合つて笑えば、たしかに思い悩んでいた頭がすつと軽くなった。目を細めて笑うアルフレッドの顔に、思わずとくと胸が高鳴る。触れたい、と何度も思つて自重してきた顔が目の前にある。わたしはまるで吸い寄せられるように無意識に手を伸ばしていた。

「……姉さま？」

弟がいぶかしげな表情をして、わたしを見詰める。いくら仲のいい姉弟とはいえ、顔にベタベタと触るなんておかしい。わかっているのに、触れたいと思う気持ちが抑えられない。

「うそ、どうして……？」

張りのある頬を撫でれば、アルフレッドがくすぐったそうに身を振る。びつしりとまつげが生えている瞼がゆっくりと瞬きした。

「どうしたんの姉さま、幼いころのように頬にキスして慰めてくれるの？」

ちがう、と口に出す間もなく、わたしはゆっくりと唇を近づけていく。お酒も入っていないのに、理性が消え失せてしまったかのような感覚。お願いだから突き放してと縋るようにアルフレッドを見詰める。骨張った手が肩に触れる。つきとばさずにやさしく肩を撫でる手つきに、背筋が粟立つ。

「……ほんとうにキスしてくれる？　うれしいな」

「んっ、ふう……！」

アルはわたしを拒むことなく、やわらかい唇を重ね合わせる。しつとりとした感覚に顔が赤くなり、視界が水の膜を張っていく。こんなの、おかしい。一生隠し通そうとしてきたのに、身体がいうことをきかない。

「ねえさま、泣いてるの？　もしかしてそんなにボクとキスできてうれしいのかな？」

「ち、ちが」

「ちがわないでしょう？ 姉さま、愛おしそうにボクに触れてるじゃないか」
アルフレッドの太ももに手を置いてからゆつくりと撫でる。まるで恋人が戯れるように男の人の筋張った筋肉を撫でていく。ちがうのに、ほんとうはこんなことするはずじゃなかったのに。

「どうしたの姉さま、もしかしてあまえてるの？ もつとキスしたいんだね？」
蜂蜜みたいにどろりとしたあまい声で囁かれて、アルフレッドの尖った舌が閉じた唇の隙間から入り込んでいく。こんなことしたら、家族には戻れなくなっちゃう。震える手で胸を押しかえせば、忌々しげに眉を歪めた。

「姉さま、ここまで来たらもう止められないよ？」

アルフレッドがもう一度、あの妖しいルビーの首輪をわたしの眼前にかかげる。おもいきりその輝きを見詰めてしまった。さっきまでなんともなかったの

に、まるで網膜が焼かれたみたいが目が眩む。

「あれ……？ な、なんで」

気が付けば胸を押しかえすために添えていた手は、アルフレッドの上着を脱がしにかかっていた。細い指が勝手にブラウスの白いタイをほどいていく。これじゃまるで男女の関係にならないかと誘っているみたいじゃない。

さあと血の気が引いて、言い訳しようと顔を上げる。お願いだからわたしを突き放してと縋りながら視線を向けた弟の顔は、うっとり瞳を細めながら微笑んでいる。

「姉さま、ボクのことずっとそういう瞳で見てたの？」

「ち、ちが」

「ちがわないよね？ ボクの服を脱がしにかかって誘ってるんだろう。かわいい姉さま、ひょっとして自分でも混乱してるのかな？」

アルフレッドに後ろに手を回されて、首元のボタンを外される。あ、と思った瞬間には、ドレスのボタンを外しにかかれていた。

「や、やめ……」

「なにいつてるの？ やめてほしくなくせに」

慣れた手つきでドレスを脱がされて、あっという間にコルセットとショーツ、ガーターベルトだけの姿に剥かれてしまう。太ももの内側、皮膚の薄い部分を撫でられると、ぞくつと背中が震えた。

「姉さまの肌、すべすべでやわらかくてとってもきもちいい。ここはどうなってるかな？」

しゅるり、と器用にコルセットの紐を緩められてはぎ取られれば、たゆんと豊かな胸がまろびでる。ツンと頭をもたげている先端を見つめられて、アルフレッドがふつと鼻で笑った。

「こんなにかわいくツンって尖ってるのに、やめてなんて姉さまは嘘つきだね」
豊かに実った白い双丘に、弟の指が沈んでいく。ゆっくりと揉まれて、与えられる力に従って形を変えるさまがいたたまれない。

「っ、こら……！ もまないでっ……！」

震えながら抗議してもアルフレッドは穏やかに笑うだけだ。弟は優しい子のはずなのに、わたしが嫌がっているのにやめてくれない。

「もうっ……、ほんとうに、やめて……！」

掠れる声で懇願すると、胸を揉みしだく指が止まる。ほっと息を吐いたのもつかの間、しなやかだけど骨ばった指がきゅっと胸の飾りを摘まんだ。じわっ♡としたむずがゆいような、くすぐったいようななんともいえない感覚が背中を駆け巡っていく。

「ひゃうっ……！！ な、なにをするの？！」

「だって姉さまが揉まないでって言ったんでしょ？　だから先っぽをさわってほしいのかと思ったんだけど、ちがったかな？」

いますぐやめさせなきゃいけないのに、身体がぞくぞくして身動きできない

♡
「や、やめなさいっ♡ちくびっ♡つままないのっ……！」

やわらかい力で先端をきゅむきゅむ♡と指で繰り返して挟まれて、乳首が楕円の形から、細長く尖るイヤらしい形へ変化していく。ぞくぞくと腰を疼かせる快感と、刺激に反応する乳首にいたたまれない気持ちになって弟を睨み付ける。

「あれ？　気に入らなかった？」

弟が天使のような綺麗な顔で首を傾げる。ただ先端をつまむだけだった指が、つまんだまま乳首を押したり離したりして、圧力を加える動きに変化する。尖って芯を固くさせはじめていた乳首の奥に響くような動きが、きもちいい♡

「~~~~♡こねこねもだめっ……!」

きゅっ♡きゅっ♡とリズムカルに摘ままれたり、指を擦り合わせるようにこねられれば、あつという間に言い訳ができないほど固く尖ってしまう。好きな男にいじってもらうために欲情してる勃起乳首♡このまま流されたらもつときもちよくしてもらえるかな、という信じられない考えが頭をもたげて、必死に頭を振る。

「~~~~♡アルフレッド、や、やめてっ♡」

「どうして? 小さいころは甘えるボクのことを姉さまの胸で抱きしめてくれたよね?」

「そんなむかしのはなし……、もちだされてもこまるってばっ♡ふうっ♡」

屋敷に来たばかりの頃のアルフレッドは、時々死んだ母恋しさに泣くことがあった。それをかわいそうに思っ、添い寝したこともある。そのときに抱き

しめてあげていたから、意図せず胸に顔を抱き込んだこともあったかもしれない。でも、いま勝手に胸をいじくりまわされているのは違う。こんなの、健全な姉弟の関係じゃない。

「姉さまのおっぱい、あの時と同じようにあたたかいよ」

手を広げて指を食い込ませられれば、おっぱいがアルフレッドによつて形を変えられる。むにゅん♡むにゅん♡と胸をもみしだく弟の顔は、どう考えても母が恋しい健気な少年じゃない。女に欲情している男でしかない。

「ぜ、ぜんぜんちがう、あのときのアルは、わたしの胸に顔を埋めて、泣いていたもの……」

「そうかな、変わったのはお互いさまだよ。姉さまのおっぱいもずいぶん大きく育って、えっちになったんじゃないかな？」

抗議の声を上げれば、やわらかい金髪が胸に触れる。そのままやわらかい唇

をおっぱいに押し付けられて、ちゅうっ♡と肌を吸い上げられた。

「ひうっ♡な、なんでえ……！」

「姉さまはおっぱいを恋しがる少年をご所望のようだからね」

アルフレッドは悪びれもせず笑って、厚く湿った吐息で肌をくすぐる。妙な気分になりそうなのを抑えられない。おっぱいの形をたしかめるように、ぐるりと輪郭を舌でたどられる。ぞくぞく、と肌が疼く。アルフレッドは上目遣いで人なつっこい笑顔を浮かべた。純真に振る舞いながら、舌先でゆつくりと乳輪を辿っていく♡少しだけザラザラしてて、やわらかくて熱いぬるついた舌とぬるついた唾液の感触♡腰のあたりがきゅんきゅんして、乳首が震えて切ない♡

だめだとわかっているのに。アルフレッドの頭を抱き込んでしまう。

「っ♡ふっ♡アルったら、お姉さまのおっぱい吸いたいの……？」

挑発するようなセリフでふわふわの髪を梳くように撫でる。身体がおかしい、いうことをきかない。ついさっきまでこんな間違いが起きないように家を去ろうとしていたのに、わたしの身体はいつたいたどうなってしまったんだろう。アルフレッドを突き飛ばしても、止めなきやいけないのに。

「ふふ、吸っていいの？　ボクはもうこどもじゃないのに」

アルフレッドがぬるついた舌を伸ばす。ぺとぺと♡と胸と乳首の境目をたどっていく。緩慢とした舌の動きに、焦らされているのがわかる♡

「っ♡ふうっ♡」

やわらかく湿った舌で愛された場所が、敏感になっていく♡はやく乳首触ってほしいって、それしか考えられなくなっちゃう♡

ぷくっ♡っていやらしく欲情してる突起を、ぐにぐに♡って舌で押しつぶしてほしい♡ちゅうちゅう♡って吸ってほしい♡乳首できもちよくなりたいて

ことに頭が支配されて、理性が消し飛びそう♡

「アルっ♡あまり姉さまをこまらせないでっ……♡」

コリコリになつてゐる乳首に気づいてるくせに、ぺろぺろしてくれないっ♡乳首が切なさうに尖つてゐるのに、無視なんかしてイケない弟♡

いやらしい願望が次々と浮かんで浮かんで、消えてくれない♡なんども考えて無理やり打ち消してきた想像が、とまらない♡もうぜんぶめちゃくちやになつていいから、アルとエッチしたい♡

「姉さま、なにされたいの？ 察しのわるい弟に教えて、エリゼ姉さま♡」

ぴとっ♡と乳首の根元にあたたかい舌を這わせて、ガラガラした瞳でわたしを見上げる。きゆう♡とおまたが熱くなつて、ゆらゆらと腰が揺れ始める♡

「アルっ♡姉さまの乳首♡きもちよくして？」

甘えるように耳の裏をくすぐりながら、両手で胸をよせてみる。むにゅう♡

とアルフレッドの顔を挟んで、誘惑してる♡こんなの姉失格だ♡挟みこんで、おっぱいを頬を撫で撫ですると、アルフレッドは愉快そうに喉奥から笑い声を漏らした。いやらしい姉だとあきれてるのかもしれないけれど、とめられない♡

たば♡たば♡とおっぱいを揺らせば、尖った乳首がいやでも目に入る。自分のエッチな姿を見て、興奮したようにじわ♡と愛液が下着に滲んでいく♡乳首がじんじんしてるだけじゃなくて、全身欲情しちゃってる♡

「ふふっ♡姉さまそんなに乳首きもちよくなりたかったんだね♡たしかにコリコリで真っ赤に熟れててとってもおいしそう♡ボクのためにこんなにおいしそ

うになっちゃったんだ♡」

アルから発せられたとは思えない、下品で聞くに堪えないセリフ。それなのに、いやらしい期待をしておっぱいふるふる震わせて舐めてもらえるのを待ってるなんてぜったいおかしい♡

なまあたたかい息が、胸の飾りにかかる。ぴくっ♡と身体が強張った瞬間、見透かすようにアルフレッドが笑った。力の入っていない舌がゆっくりと、根元から先端までゆっくりとたどるように這わされる。

「んひっ♡」

ツンと尖ったそこに唾液をしみ込まれる感覚に、ぞくぞく背中が粟立つ。

軽く舐められてるだけなのに気持ちいい♡か細い声が裏返った。

「姉さま、おっぱい敏感なんだ？　じゃあこっちも舐めてあげるね♡ちゃんと両方気持ち良くしてあげる♡」

まだ唾液に濡れていないほうの乳首も、同じようにねっとり舐めまわされる。舌が這うたびにじいん♡と頭が痺れていく。たっぷり唾液をしみ込まされた乳首を交互に舐めしゃぶられる♡舌が這ってない乳首は指でこねこねされて、休む暇なんか与えてもらえない♡ずっと乳首かわいがられて、頭おかしくなるっ♡

「アル♡ちくびこねこねやあ♡ぺろぺろっ♡ってするのもらめっ♡」

舌足らずの声でだめなんていっても説得力がない。唾液ですっぱり潤った乳頭を指でずりずり♡ってされたら、おっぱいからビリビリした電流が頭に伝

わって、理性を痺れさせていく。明確にメスを気持ち良くしてやろうという意図を感じる舌づかい♡ピン♡ピン♡と先っぽも弄ばれるように弾かれて、ぶるっ♡と乳房が揺れた。

「おっ♡ほお♡お母さんが恋しいこどもはっ♡そんなにやことしないっ♡」

「そうだね姉さま♡姉さまが気持ちよさそうだからつい調子に乗っちゃった。じゃあ赤ちゃんみたいにおっぱいちゅうちゅう♡って吸ってあげるね♡あどけない弟におっぱい吸われて、気持ちよくなんならないよね？」

胸に顔を埋めたアルフレッドがギラついた瞳でこちらを見上げながらみせつけるように口を開ける。呼吸だけでアルのクチのなかの温度を想像して、きゅ♡♡とおマンコがわなないてしまう♡あどけない弟なんて、白々しい。わたしに欲情してるオスのくせに♡

「エリゼ姉さま……♡ちゃんとおっぱい吸ってあげるから感じちゃダメだよ？」

ちゅっ♡と湿った口腔の柔らかい筋肉がしつとりと乳首に張り付いていく。

あたたかい肉壁に四方八方を包まれて、それだけでビクっ♡と腰が跳ねる。空いた方の乳首はかわらず指でこねられてる♡荒くなる呼吸を誤魔化すように、ぎゅう♡とシーツを握りしめた。

「んちゅっ♡姉さま♡おっぱいかわいいね♡」

ぢゅっ♡ぢゅっ♡と乳首を締め上げながら吸い上げられて、触られてもいないおマンコがぬかるんでくのがわかる♡

「姉さまったら乳首敏感♡自分で弄ってたの？」

幼いころにアルフレッドがわたしのおっぱいに顔を埋めていた時に、乳首を掠められたこ

とがあつた。思えば、それがわたしの性の目覚めだったのかもしれない。おかげで自慰するときには必ず乳首をいじめながらおマンコかわいがつたから、弱点になつてゐるんだ♡

ぢゅっ♡ぢゅっ♡と卑猥な水音を立てられながら、乳首を圧迫しながら吸いあげられていく♡ぢゆるるっ♡と音を吸いあげられるように固くなつた突起がぶるぶると震えて、おなかの奥が切なくてたまらない♡脳みそがとろけて、言うべきことでないこともするりと口からすべりおちてしまう♡

「じぶんでっ♡いじつてたっ♡あなたに触られるの考えながら、こねこねっ♡つてしてたの♡いけないお姉さまでっ、ごめんなさいっ♡」

「へえ♡姉さまったら正直でかわいいね♡でもいまの姉さまは寂しいボクを慰

めるためにおっぱい貸してくれてるだけだから頑張って気持ちよくならないようにしないとね♡ほら、腰ビクビク♡♡♡ってするの我慢して♡」

アルフレッドは釘を刺しながら、乳頭の窪みにぴったりと舌を合わせてぐにぐに♡と押し当ててくる。母恋しい小さな子は、ぜったいこんな風に乳首を舌で弄んだりしない♡♡赤く腫れた欲情乳首の芯をほじほじなんてしない♡♡

「ふっ♡うう♡ちくびのさきっぽ♡きもちいい♡♡こんなのだめ♡♡こんな♡舌でほじほじなんて♡♡悪い子♡♡姉さま困らせて♡♡いけない子なんだから♡♡」

咎める声も甘ったるくて、きもちいいの隠せてない。アルフレッドは無視してぢゅう♡と乳首を吸い上げながらぺちぺち♡と舌で先っぽをビンタする♡すっかり性感帯になったそこを舌で弾かれたら、濁った声を抑えきれない♡

「おっ♡ちくびっ♡やあ♡おっぱいなんででないのにっ♡きもちよくておがしぐなりゅっ♡」

背中を反らして感じいつて、おっぱいをより突き出してしまふ♡唾液でベトベトのおっぱいがたゆん♡と震えれば、アルフレッドがうれしそうに乳輪をぐにい♡と指で押し広げた。

「やあ♡」

「姉さま、あれだけいったのに気持ちよくなってるじゃないか♡」

アルフレッドが声を弾ませながら責めたてる。乳頭をほじくるようにぐにぐに♡と舌を波打ちながら刺激されて、思わず喉を反らしてしまう♡

「ふっ♡だってえ♡アルフレッドがあ♡わたしがちくびいじめるんだものお♡」

「へえ、姉さまったらボクのせいにするんだ♡こんなに大きくなったのもボクのせい？」

拡げられた乳輪の大きさを思い知らせるようにゆっくりと輪郭を舌でたどられる♡貞淑には程遠い大きさのデカ乳首♡散々自分で弄り倒して開発しちゃった場所♡アルフレッドに責められると、とろお♡と愛液が滴ってしまう♡

「いやらしい姉さま♡いいよ、ボクのせいにして乳首気持ちよくなっちゃえ♡」
ぐにゅぐにゅ♡コリコリ♡

乳首の奥に舌と指をそれぞれ埋められて、ぶるぶる♡と揺さぶられる♡乳頭の奥のいちばん気持ちいい場所にひびく♡♡いちばんすきな場所をずーっと刺激されたら、こんなの耐えられるわけない♡ぐ♡♡と勝手に腰が浮いて、気持ちよくなってる♡♡ってアピールしちゃう♡おなかの奥がじいん♡♡って痺れて、ヒクヒク♡♡っておマンコ震え出す。

「やあ♡ちくび♡♡いじめられると♡おなかへんになりゅ♡♡」

「はは♡乳首だけでイキそうなの？ いいよ♡エリゼ姉さま、いっちゃえ♡」

左右の乳首をぐにゅう♡と引つ張られて、指で押し上げながら抜きあげられる。まるで搾乳されてるような下品な動きに頭が真っ白になる♡

「んおっ♡イっ♡イっグう♡ちくびでイクうっ♡」

どぶっ♡とショーツのなかで愛液が泉のように湧いて出る。布をドロドロに濡らしながら、脳裏でパチパチ♡と火花が散った♡

「あふっ♡ふうっ♡ふーっ♡」

発情した獣みたいに、荒い息で呼吸を整えていると嬉しそうに口許を歪めているアルフレッドが見下ろしてくる。

「あーあ、姉さま乳首でイっちゃったね？」

すりすり♡と絶頂の余韻が残る先端を指の腹でなぞりながら、小刻みに痙攣するわたしのカラダをうれしそうに撫でる。乳首でイくななんて、信じられないと呆然するわたしに、いやらしい身体を自覚させるようにもう一度ゆっくりと

乳首をしごきあげた。

「ふうっ♡」

ガクガク♡と大きく身体をはねさせたわたしの微笑み、アルフレッドは太ももの内側へと手を伸ばしてくる。

「そ、こはだめっ♡」

弟が一番大切な場所に触れようとしていると悟って身体を振ろうとするけれど、力が入らない。わたしの抵抗なんてまるで意に介していないように、アルフレッドがわざとらしく手の甲でびしょびしょに濡れたクロツチを撫でた。

「はう♡」

すりっ♡と期待して膨らんでる肉豆を撫でられて、それだけで力が抜けていく。

「だめ、じゃないよね姉さま。ショーツびしょびしょじゃないか♡さわってほ

しくてこんなに濡らしたんでしょう？」

愛液がしみ出して膨れたマン肉に張り付いた布をアルフレッドの長い指が撫でていく。ぷに♡ぷに♡と指を沈められれば、期待しておマンコがわなないてしまう♡

「あれ、気のせいかな。さっきよりもここ濡れてるよ♡」

割れ目をゆっくり指でなぞられるとくちゅり♡という粘っこい水音が鳴る。ぴたぴたの布をなぞられると、おマンコのかたちがくつきりと浮き出てしまっているのがわかる♡わざとクリトリスを避ける指先に意識が集中して、ひくん♡と肉豆が震えた。

「ね♡姉さま♡ボクに姉さまのいやらしいところ見せて♡おマンコひろげてみせて♡」

「っっ♡アルフレッドったら♡」

そんなことできるわけない♡できるはずない♡それなのに、声色が好きな男にからかわれて弾んだ高さになる。わたしはわずかに腰を浮かせてショーツに手をかける。自分でもわからないまま下着をずりおろせば、むわっとした発情した女の匂いが部屋に広がった。愛液で蒸れていた恥部が外気に触れて、びくっ♡とおマンコがわななく。

「姉さま♡素敵なおマンコみせて♡」

絶対、ぜったいだめなのに♡

「だめ、かな？」

幼い子どもが自分のかわいさを利用するように、アルフレッドが小首を傾げる。命令されてるわけじゃないのに、胸の奥がきゅんとうずいて、身体が勝手に従っちゃう♡

太ももをゆっくりと開けば、アルフレッドが生唾をのみながらおマンコ凝視

してくる♡外気と視線に晒されたいやらしいピンク色をした粘膜がピクピク♡
と震えてしまう♡これじゃ自分から、アルに欲情してゐるってバラしてるみたい♡